國學院大學学術情報リポジトリ

『清悦物語』にみる語り手の背景：「仙北次郎物語」における秋田城之助の問題

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 三田, 加奈
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001463

『清悦物語』にみる語り手の背景
――「仙北次郎物語」における秋田城之助の問題――

三田加奈

論文要旨

『清悦物語』の中の三つの物語のうち三番目の「仙北次郎物語」の前半は、『吾妻鏡』の文治五年九月七日の記事を下敷きとして物語が構想されている。続く後半は『清悦物語』独自の内容で、秋田城之助（秋田実季のこと）を話題にする。その実季は寛永七年に咎により、伊勢朝熊に蟄居する。同年に、清悦および清悦と関係する常陸坊も死去するが、『清悦物語』に実季を登場させるのは、この物語特有の事情が隠されているようである。

晩年の実季は、秋田氏の系図作りに没頭していた。実季の系図作りには、自らの出自に関わる背景があったようで、『清悦物語』の中で秋田城之助が「仙北ノ次郎」「家老ノ子孫」のいずれであるか明白にされないこととも関わってくる。城主の正統性をめぐる政治的な事情が働いていたと考えられる。

もう一つの問題は、『清悦物語』における常陸坊についてである。清悦は常陸坊と同一人物のように描かれ、その常陸坊は「仙北ニテ死去」（南部伯爵本）と記されるなど、仙北の地と常陸坊の関係が強調される。常陸坊はこの時代に秋田や青森に多く檀那を抱えていた「持渡津先達」にその名が見える。その檀那に「安藤氏」がいる。この安藤氏および秋田氏は、若狭の羽賀寺と関係がある。日本海の海域ルートの関係が、物語や伝説の形成に影響を与えていると考えられる。

キーワード

清悦物語（せいえつものがたり）　秋田実季（あきたさねすえ）　羽賀寺（はがじ）　常陸坊（ひたちぼう）　八百比丘尼（はつぴゃくびくに）

一、はじめに

『清悦物語』は、清悦上人が語るのを村田の御曹司右衛門太夫の小姓である小野太左衛門が聞書きしたという体裁の物語である。物語の中で小野が清悦上人に師事したとされる時期は江戸前期（元和二年から七年までの間）[1]で、末尾に清悦死去が寛永七年とあることから、『清悦物語』がまとめられたのはそれ以降となろう。しかし、その頃から、『清悦物語』が写本として出回っていたのかどうかは定かではなく[2]、正本[3]の所在も不明であり、写本は江戸中期から後期にかけてのものが、外題・内題の異同を含めて多く現存する[4]。

『清悦物語』に関する先行研究は、柳田國男の「東北文学の研究」（『雪国の春』）が早くにあり、常陸坊海尊、八百比丘尼の人魚の肉や九穴の貝、また、奥浄瑠璃や座頭などの芸能の関係を説いている[5]。続く野村純一は、「椿は何故「春の木」か」の論考で、椿油を女性の髪油に利用することに加え、椿油を海面に掛けて、海女が漁労に使う民俗を取り上げ、椿を携えて回国する女性との関係[6]を指摘している。

しかしながら、『清悦物語』に八百比丘尼との関係は一部に想定できるところもあるが、女性唱道者と深く関係づけるのは困難である。物語の内容は争乱の場面が多く、また、大名の家筋に関わっているからである。物語の作者と目される語り手の背景を探るためには、本文を精査しながら追究していく必要がある。本稿では、語り手と作品に登場する「秋田城之助」との関わりに注目していく。

『清悦物語』本文は、大きく「清悦長寿物語」「高館合戦物語」「仙北次郎物語」という三つの挿話から構成される。「清悦長寿物語」と「高館合戦物語」は義経主従に関連する内容であるが、「仙北次郎物語」は義経主従の高館合戦後から始まる物語である。拙論「『清悦物語』の諸本と分類及び背景―書誌事項と地名を中心にして―」[7]でも、物語全体は伝説や語り物等の影響が多くみられると述べたが、本稿が話題とする「仙北次郎物語」の前半は、『吾妻鏡』「文治五年九月七日」の記事等や史実に基づいた物語構成である。しかし、史実そのものというよりも、事件に虚構を交えたエピソードから成っている。

本稿では、この「仙北次郎物語」を取り上げ、登場人物や物語展開を『吾妻鏡』やほかの史書等の記事と比較検討を行い、その虚構性を具体的に示し、聞書きの方法をとる物語の「語り手」の意図に注目していきたい。『清悦物語』の「聞き手」であり、書写したと

される小野太左衛門については不明な点が多く、実在の人物であるのかも判別し難いため、本稿においては『清悦物語』の成り立ちに関わる者を「語り手」と呼び、その背景を探ることにする。語り手の背景を求めるにあたり、物語内の清悦上人の存在を無視することはできない。一般の伝説では、清悦上人はたびたび常陸坊と同一人物[8]として扱われるが、『清悦物語』においては、別人物として描かれる。では、清悦とは一体誰なのか。また、常陸坊とどのような関係にあるのか。この問題を探るために、本稿では「仙北次郎物語」に描かれる事柄を中心に「語り手」について考察していく。

なお、『清悦物語』のテクストは、須田学翻刻[9]の南部伯爵家旧蔵本（以下、「南部本」という）と別本系統[10]に位置付けられる福島県立博物館蔵本（以下、「福島本」という）の二本を用いる。別本系は、南部伯爵家旧蔵本系と比べ、文体に幸若舞曲などの文芸表現の影響を受けた部分があるが、物語の構成自体に大きな差異はないことから、細部の表現等の検証については必要最小限に留める。両テクストの大きな違いは、南部本は、大名家（南部藩）に所蔵されていたもので保存状態が良いのに対し、福島本は裏見返しに「口演　此書物何方さまへまいりそろとも　名元方へ御返し被下可候　以上　大室五兵衛」とあり、貸本屋に出されている本であることが確認されるなど、傷み具合からして多く読み込まれた様子が伺える。なお、現存する『清悦物語』の中で、貸本屋の本と確認できるのは、この一冊のみである。

二、『吾妻鏡』と「仙北次郎物語」との対照

「仙北次郎物語」の前半は、その内容が『吾妻鏡』の記事に基づいて構成されていることについてはすでに述べた。たとえば、『吾妻鏡』によると、文治五年七月十九日に奥州・泰衡征伐のために頼朝が鎌倉を出発し、八月十日に、藤原國衡が和田義盛の矢で射られて疵を負い、そのあとで大串次郎によって討ち取られる。一方、藤原泰衡は九月三日に河田次郎の裏切りによって殺害される。このあと『清悦物語』は『吾妻鏡』には見られないが、大崎沼倉での頼朝による義経およびその家臣の葬礼[11]の後、いったん頼朝は鎌倉に戻り、征夷大将軍を名乗る。そして、再び奥州征伐に向かうという展開をとる。奥州征伐に向かう部分を、南部本および福島本から引用する。

〈南部本〉

文治五年己酉七月十九日ニ将軍頼朝公奥州へ御発向ナリ、其勢廿八萬余騎是秀平子孫誅罰ノタメ也。錦戸太郎國平八月十日ニ誅セラル、次男泰平ハ九月三日ニ誅セラルゝ也。

〈福島本〉

文治五年己酉七月十九日ニ鎌倉殿奥劦へ御發向其勢廿八万四千余騎是ハ秀平子孫を討罰のために御下向被成大合戦西城戸太郎國衡ハ八月十日ニ被討次男伊達次郎泰衡ハ九月十三日ニ被討…（*傍線は筆者による）

南部本・福島本とも、頼朝が二十八万余騎を率いて出発し国衡泰衡を討ち取る部分は同じであるが、人名の表記にいくぶん違いが見られることや、福島本では泰衡を九月十三日に討ったとする日にちに、違いが見られる程度である。

続いて、『吾妻鏡』と『清悦物語』の南部本・福島本を対照した表をもとに、その物語内容の大きく異なる部分として、敵将の尋問の場面を話題に取り上げ、以下考察を加えていくことにする。

『吾妻鏡』　文治五年九月七日

宇佐美平次實政、泰衡が郎従由利八郎を生虜り、相具して陣岡に参上す。しかるに天野右馬允則景生虜るの由これを相論す。…實否を囚人に尋ね問ふべきの旨、景時に仰せらる。景時由利に立ち向ひて云はく、汝は泰衡が郎従の中にその號ある者なり。眞偽あながちに矯飾を構ふべからざるか。ただ實正に任せて言上すべきなり。何色の甲を著する者汝を生捕るやと云々。由利忿怒して云はく、…問ふところの事、さらに返答に能わずと云々。…問ふところの事、さらに返答に能はずと云々。景時すこぶる面を頼め、御前に参りて申して云はく、この男悪口のほか、別して言語なきの間、糾明せんと欲するに所なしてへれば、仰せて云はく、景時無禮を現はすによつて、囚人これを咎むるか。もっとも道理なり。早く重忠これを召し問ふべしてへれば…由利云はく、客は畠山殿か。殊に禮法を存じ、以前の男の奇怪に似ず。もつともこれを申すべし。黒糸縅の甲を著し、鹿毛の馬に賀する者、まづ予を取りて引き落す。…件の甲馬は實政がなり。すでに御不審を開きをはんぬ。次に仰せて曰はく、この男の申状をもつて心中を察するに、勇敢の者なり。…豫がごときの不肖の族は、また生慮となるの間、最後に相伴はざるものなり。そもそも故左馬頭殿は、海道十五ヶ國を管領せしめたまふといえども、平治逆亂の時、一日を支へたまはずして零落す。數萬騎の主たりといへども、長田庄司がためにたやすく誅せられたまふ。古と今と甲乙如何に。泰衡管領せらるるところの者は、わづかに両州の勇士なり。数十ヶ日の間、賢慮を悩ましたてまつる。一篇不覺に處せしめたまふべからざるかと云々。

南部本

然ルニ仙北ノ次郎囚トナレリ、頼朝公御使ヲ以何トテ奥ノ一統ハ我ニ合テ、卅日ノ内ニ軍ニカケ負タル由ヲ仙北ノ次郎ニ御尋ナレトモ御請ハ不申結句悪言ヲ云、依之其趣ヲ言上ス。重テ柴田ノ太郎ヲ以御尋アレハ、次郎答テ云、最前ヨリ御請不仕儀ハ上使ナレトモ士カ侍ニ物申ニ立カヽリ被申聞故ナリ、柴田殿能聞玉ヘ左馬頭義朝公ハ源平両家ニシテ日本國ヲ半分ツヽ持、然處ニ大賢門ノ軍ニ三日三夜ニカケ負尾張ノ國ヌマノ長田カ宿所ニ落サセ玉フニ、秀平カ一族ナレハコソ日本勢ヲ引受卅日ハ闘タリト申、其趣頼朝聞召能宣フ武士ノ手本トテ縄ヲ許サレ先祖ノ領知無相違賜リ仙北へ帰国、文治五年ノ冬ヨリ天正十八年迄四百六年ノ間知行ス。

『清悦物語』　福島本

奥の一黨一々敗軍の処ニ仙北の次郎生捕被成。然処ニ頼朝御使ニテ仙北次郎ニ御尋ハ、何とて奥の一黨頼朝か合戦ニ会未タ三十日の内ニ軍ニかけまけけるこそ年よわけれとの御使也。次郎御使ニ向テ悪言申しけり。御使立帰リ、次郎悪口申段申上けれハ、重ての御使柴田太郎を以被仰御返事不申。何とて悪口申上候との御諚也。仙北承リ、以前不申上事如何ニ君よりの御使成共侍か侍ニ向立なから申間御返事不申上也。古頭殿左馬頭よりともハ源氏平家と日本半分も被持候て待賢門の夜軍ニ三日三夜の内ニかけさせ給へ。尾張の長田庄司か館へ落させ給ふハ如何ニ云や秀平一黨なれハこそ日本勢引請三十日戦申と御申候へ。柴田立帰リ残さす申上けれハ、頼朝聞召能こそ申次郎哉尤道理也。其次郎縄を免せと仰被ける。則御前へ被召出仙北の知行無相違被下置也所知入せよと仰せけれハ、難有と文治五年の冬の頃所知入して、天正十八年の時分迄四百六年相続キ知行せし也。

(1) 第一回目の訊問

まず、『吾妻鏡』によると、文治五年九月七日に由利八郎は生け捕られるが、続いて誰に生け捕られたかについての詮議が始まる。一方、『清悦物語』では生け捕られた者は仙北ノ次郎とある。また、『吾妻鏡』では、生け捕った由利八郎を尋問する人物は梶原景時とするが、『清悦物語』では固有名ではなく「御使」と記す。その理由は、『清悦物語』では義経葬礼前に行われた義経の首実検の際、義経の口から「含状」[12]が見つかり、その中に「梶原カ讒言」の言葉が書かれてあり、怒った頼朝はすぐに梶原父子を殺させる。「梶原父子カ首ヲ刎ヨト御諚ヲ以、同キ年五月十三日ニ梶原父子被誅。」（南部本）とある。したがって、九月七日には梶原景時はこの世に存在しないことになり、『吾妻鏡』の尋問者の梶原景時を、『清悦物語』では「御使」とせざるを得なかったのである。

続く訊問内容について見ていくと、『吾妻鏡』では梶原景時が由利八郎に、由利自身を生け捕った者の容姿・服装についての詳細を尋ねたのに対し、由利八郎は忿怒（ふんぬ）して「悪口」を返したとある。一方、『清悦物語』では、「御使」が「奥ノ一統」がなぜ三十日以内に滅んだのかと尋ねると、仙北ノ次郎は答えず悪言を放ったとある。両者の尋問内容に違いはあるが、いずれも不調に終わる。

(2) 第二回目の訊問

『吾妻鏡』では、景時が頼朝に由利の悪口を伝えたところ、報告を受けた頼朝は景時の訊問の仕方に問題があるとして、訊問者を畠山重忠に代えさせる。畠山重忠の由利八郎に対する言動は、景時とは異なり礼儀正しく、由利は生け捕り者について「黒糸縅の甲を著し、鹿毛の馬に駕する者」と応える。それにより、宇佐美平次實政が生け捕り者であることが判明する。

一方、『清悦物語』では尋問者が柴田ノ太郎に代わり、二回目の訊問は、仙北ノ次郎に対し一回目と同じ内容を柴田ノ太郎が尋ねると、仙北ノ次郎は源義朝の「待賢門の戦い」の例をあげ、義朝軍が「三日三夜ニカケ負ケ」たと述べた。仙北ノ次郎の言葉の背景には、義朝の軍が三日で敗走したのに対し、「奥ノ一統」が三十日間も戦いつづけたことに対する自負が示されている。同じ訊問を『吾妻鏡』では、重忠に伴われて頼朝の御前に来た由利八郎に対して、頼朝の口から質される。『吾妻鏡』のこの部分に基づいて、『清悦物語』の尋問は構想されているといえる。したがって、『清悦物語』の「御使」および柴田ノ太郎は、頼朝の代役を果たしていたことになる。

同じように、『吾妻鏡』における頼朝の由利八郎に対する評価の「勇敢者」は、『清悦物語』では「武士ノ手本」（南部本）「尤道理」（福島本）などといった言葉で示されている。

このように見てくると、『清悦物語』は『吾妻鏡』を下敷きに、物語を構想していることがわかる。しかし、この後の展開は、『吾妻鏡』にはなく、『清悦物語』独自の内容が続く。すなわち、由利八郎の処遇を畠山重忠の「芳情」に一任させたところで、『吾妻鏡』の編纂者の関心から由利八郎は消えてしまうが、『清悦物語』は仙北ノ次郎に「先祖ノ領地無相違賜リ仙北へ帰国」させることになる。そこで、仙北ノ次郎は領地に復帰し、再び活躍の機会を与えられるのである。以下に章を改めて詳しく触れていきたい。

三、仙北ノ次郎と秋田城之助

『吾妻鏡』で「芳情」を施すようにと仰せつけられた畠山重忠により、由利八郎は勇敢で誉れある者として、九月三〇日に「兵具」を解かれて恩赦にあうが、「仙北次郎物語」においても、仙北ノ次郎は縄を許され、仙北の地に戻ったことになる。そして、「文治五年ノ冬ヨリ天正十八年迄四百六年ノ間知行」（「南部本」）を賜ったとあり、仙北ノ次郎の長寿を伺わせるが、この「四百六年」は、伝説上の数字と思われる。ところで、この「四百六年」間続く平穏無事の知行が、天正十八年に起こった異変によって失うことになるが、「仙北次郎物語」では次のように示されている。

〈南部本〉

同（天正）十八年ニ太閤秀吉公相州小田原北條ノ門族御誅罰トテ、日本ノ諸軍勢小田原へ雖相詰仙北ハ病気故家老ヲ為代官差遣、御合戦終テ上其料ニ依テ仙北ヲ西国へ配流ナリ。ソレヨリ家老ニ仙北ヲ賜慶長六年迄ハ仙北秋田ヲ知行ナリシカ、同七年ニ仙北ヲ所替岩城ノ内宍戸カ知行成、今ノ宍戸ノ領主秋田城ノ助ト云シハ仙北カ家老ト清悦語ル。（*（天正）は筆者による）

〈福島本〉

同（天正）十八年の春、太閤様相州小田原北条一家へ御陳ニ付、日本國中小田原へ相詰候節、仙北殿病氣ニ付、家老衆代官ニ罷上り御合戦に過て上洛被致候へハ、其科ニより西國へ被流家老ニ仙北を被下慶長六年迄仙北秋田知行せし也。同七年の夏、仙北より国替ニテ岩城の内宍戸を知行して秋田城之助と名乗けるハ仙北の次郎か子孫家老の子孫也と被語けり（*（天正）は筆者による）

この部分の引用から読み取れる情報を、まとめると次のようになる。

a　仙北ノ次郎は、文治五年（一一八九）から天正十八年（一五九〇）までの間、仙北の地を知行し続けた（「南部本」）ということから、仙北ノ次郎の長寿（あるいは代々襲名の可能性）を思わせる表現といえる。この部分について「福島本」では、「四百六年相續キ知行せし也」とあり、仙北ノ次郎の子孫が知行を引き継いだといった常識的な見地からの解釈を施している。

b　仙北殿は、病気で天正十八年の小田原合戦へ向かうことができなかったため、代理に家老衆を差し向わせたが、到着した時にはすでに合戦は終わっていた。そのため仙北殿は、不参加の科（とが）により西国に流された。

c　その後、仙北を知行したのはその家老で、慶長六年（一六〇一）までの十年ほど知行し、慶長七年には国替えによって岩城（いわき）の宍戸に移る。南部本では、仙北ノ次郎の家老が「今ノ」宍戸の領主で、秋田城之助を名乗る。

以上のことから、南部本では、秋田城之助は「仙北カ家老」の系譜となるが、「福島本」では「仙北の次郎か子孫家老の子孫」という二系統の系譜を併記している。一見矛盾するような曖昧な表現の背景に、どのような事実が隠されているのであろうか。

奥州の戦いの事を記した『奥羽永慶軍記』巻三の「油利・山北境合戦の事」の項に、「然るに、近年秋田・山北と違ふ故、既に合戦に及ぶ事も度々にして、又、和睦に成る事もありけり。弥々、由利党の者共は、秋田城之介に親戚・朋友のよしみ多ければ、秋田に力を合せんと志有りけれ共、人質をとられける上は、心ならず山北の味方をぞいたしける。」という記述がある。この軍記には、秋田氏、最上氏、あるいは山北氏等の関係などが記されるが、この記事からもわかる通り、由利党と秋田氏とのつながりがわかる。永禄から慶長年間は、奥羽一帯の戦国大名の興廃が著しく、秋田氏の盛衰のことは世間一般に広く知れ渡っていたことが指摘できる。

b・cの情報についても史実（通説）[13]および『奥羽永慶軍記』と比較する必要がある。すでに拙論[14]でも述べたが、慶長七年（一六〇二）、秋田から常陸宍戸に転封した人物は、秋田実季（さねすえ）と史実にある。秋田実季は慶長十年に正式に「秋田城介」と名乗ることが許されたとされる。逆に、常陸宍戸から秋田に移封したのは佐竹氏である。（ちなみに、『清悦物語』で「岩城」という地名がみえるのは、佐竹藩の岩城氏の名によると考えられる。）また、仙北殿が病気で天正十八年の小田原合戦に参加できなかったという話については、『奥羽永慶軍記』（巻十六）「津軽右京亮、浪岡城を攻め落すの事」「秋田城之介、比内返攻の事」の記事が参考になる。この概略は、比内（ひない）城に居た北信愛（のぶちか）より南部藩主である南部信直のもとに「秋田城之介が比内を攻めようとしているので、急いで後詰をなさってください」と飛脚が来る。しかし、ちょうどその時に秀吉の小田原攻めの徴集があり、参陣が遅くなることを懸念した信直は、比内を守ることを諦める。一方、秋田城之介は比内を攻め、その後小田原へと向かっている。三月十九（五）日に秀吉が京都を進発しているのに対し、秋田城之介は卯月十日になっても比内を攻撃している。つまり、小田原への参陣時期は、南部信直と秋田実季とでは異なっていることがわかる。参陣時期は異なるものの、同書の「奥州御政道の事」（巻二十）によると、南部信直および秋田実季は、秀吉により本領を安堵されている。対して、『清悦物語』では、仙北殿は病気のために小田原攻めは不参加となる。代わりに家老を差し向わせたが、不参加の科で仙北殿は西国に流される。

さて、国替えは慶長七年に確かに行われており、『奥羽永慶軍記』（巻三十六）「秋田城之介国替の事」にも、次のような記事がみえる。

秋田城之介国替の事

〔秋田氏、宍戸に遷る〕秋田城之介実季は、関ケ原の御陣へ名代を上せし故、内府公の御味方として常陸国に本領を賜り、国替の仰を蒙り、一族・郎等を引具し秋田を立て、佐竹の郎等住しける宍戸の城にぞ移りけり。然るに実季いかなる事にや、物狂はしく成て、勢州浅間へ流人と成り、配所に赴く道すがら、日来好きの道なれば、爰彼の旧跡にて歌を詠ぜし事、数々なりしとかや。

駿州富士の山を一見し浮島ヶ原の辺にて、

幾里か　知らで過けん　富士の山　見えぬる程は　空を詠めて

実李入道して本（凍）蚓と号し、家督は嫡子河内守俊李相続し給ひける。正保の頃奥州三春に国替せられしなり。

小田原征伐の十年後、関ケ原の戦い（一六〇〇）の際、秋田実季は徳川家康側（東軍）についたことが記事から伺える。慶長七年（一六〇二）から寛永七年（一六三〇）までが、秋田実季による宍戸の知行時代である。いずれの『清悦物語』伝本でも、清悦の没年は寛永七年となっており、南部本にも「今ノ宍戸ノ領主秋田城ノ助ト云シハ仙北カ家老ト清悦語ル」とある。「仙北次郎物語」における秋田実李の話は、その前からの史書や史実を踏まえて挿入された可能性が高いし、加えて『清悦物語』の語り手の背景には、そうした事情に明るい人物の関与が考えられる。南部本の〝仙北殿の家老が秋田城之助〟という強い主張にも注目すべき点である。

寛永七年後の秋田実李は、仕置の落度を理由（具体的なところは不明）に伊勢朝熊（浅間）に謫（たく）せられたというのが史実であり、『奥羽永慶軍記』でも秋田城之助は「物狂はしく成て」勢州浅間へ流人となったとある。いずれにしても、寛永七年以降の秋田実李は不遇であり、時代の流れから姿が消えていく。

四、常陸坊海尊と八百比丘尼と秋田城之助

福島本『清悦物語』の本文の末尾に、聞き手の「小野太左衛門」の問いに清悦は次のように答える。

〈福島本〉

常陸坊ハ仙北ニ被居しか老衰故か寛永七年ニ死去と承る。常陸坊の證據ニハ義経より預かりし御状箱にニ入竹子皮ニて包昼夜首にかけ被持し也。死去の節其箱宿ニ置候を拝見申ければよしつねの御判ニて常陸坊と有ニより海存とハ知し也。

「仙北次郎物語」の後半に、突如として「常陸坊」が登場し、その消息について伝える場面が挿入されるが、物語の流れからすると明らかに不自然である。常陸坊は、『義経記』では「衣河合戦」の朝に、近くの山寺を拝みに行って参戦しなかった人物である。また、『義経勲功記』（夢伯問答）などでは、その後の常陸坊の様子が描かれる。歌舞伎『勧進帳』では「義経四天王」の一人に挙げられるなど、また芸能の世界においても代表的な人物とされる。『清悦物語』では、物語の冒頭で義経高館合戦で多く討ち死にした中で、「清悦ト常陸坊此外近習二人以上四人生残」るとあって、生存者の一人にその名が挙げられる。清悦によって語られる『清悦物語』だが、冒頭と末尾の「常陸坊」の出現は、伝説上の要素も手伝って、清悦と常陸坊は同一人物、あるいは同一の背景をもつ人物として、読み手（聞き手）に印象づけられていく。

その「常陸坊」について、興味深い事例がある。常陸坊と「仙北」の関わりがみえる資料が報告されている。米良氏の文書に山北（仙北）に関わる「常陸法眼房」という名が貞和五年十二月二十九日の「奥州先達旦那系図」[15]にみえる。以下、該当部分を引用する。

奥州持渡津（もちわたつ）先達檀那系図事

一根本先達觀性房阿闍梨、其弟子戒行房阿闍梨、其弟子常陸（戒行房甥也）阿闍梨房行祐、其弟子大進阿闍梨幸慶、其弟子輔（幸曖掘弗也）阿闍梨、其舎弟太夫阿闍梨惠吽

一又常陸阿闍梨眞弟大貳阿闍梨房引導たんなの事

ぬかのふの内九かんのへよりまいり候たんなハミな〳〵當坊へ可参候、又一のへのいつかたいの中務殿も御参詣候、

一津軽三郡内、しりひきの三世寺の別當ハ常陸阿闍梨房舎弟大和阿闍梨房にて候、彼引たんな皆當坊へ可参候、安藤又大郎殿号下國殿、今安藤殿親父宗季と申候也、今安藤殿師季と申候也、此御事共當坊へ可有御参候、

一常陸法眼房弟子三位阿闍梨房先年参詣時、鵜山入道殿（彼妻三位あさり妹御前）と申人引道申て候、當坊たんなにて候、

一出羽国山北山本郡いなにハ殿・かわつら殿、此人〳〵ハ大貳殿先達申て候、常陸法眼房弟子の大貳房にて候、

貞和五年十二月廿九日

（*傍線は報告者による）

この系図には、貞和五年（一三四九）の奥州持渡津先達師弟の系譜が記されている。その中に「常陸阿闍梨房行祐」が見え、その弟子の名や檀那、檀那場がまとめられている。檀那場は青森県の糠部、一戸、津軽三郡や、秋田県の山北（仙北）、山本郡と広い地域にまたがっている。持渡津先達は、宮城県沿岸部にも多く存在していた[16]といわれる。名取（なとり）にある高館には熊野三社があり、高館もその影響下にあったと伝わる。『清悦物語』（「高館合戦物語」）に登場する高館は、名取の高館を表していることをすでに拙論[17]で指摘した。また、柳田國男や野村純一も言及する清悦社（祠）は、岩手県の内陸にある川崎町（門崎）の葛西家の敷地内にある。葛西家は、持渡津先達の有力檀那である。奥州持渡津先達や『米良文書』にある米良氏は、熊野三山と関わりが深いとされるので、常陸阿闍梨房の弟子筋には、熊野信仰の影響があることが感得される。

系図の檀那衆の名前に「安藤氏」の名が見られることは注目される。これについて、高橋正[18]は「十四世紀の半ばに、当時津軽十三湊を拠点としていた安藤氏が持渡津先達のもとで檀那となっていたことは、その権力体制が北奥羽においてある程度安定した基盤を形成していたことを示す」と述べている。「安藤殿師季」は、前項で触れた「秋田城之助」の秋田（安東）実季の系譜[19]にある。佐々木慶市によると、「長髄彦、安倍貞任の子孫を自称した津軽安藤氏の同族秋田安東氏は、安藤氏の没落後その下国の号を継承し、さらに近世初期実季（愛季嫡子）の代には古代出羽国の行政軍事の長官名である「秋田城介」に任じ、これより家号を秋田氏に改めた。中世津軽の豪族安藤氏の同族で近世大名として存続した唯一の家柄である[20]」と述べている。

ところで、『清悦物語』によると、天正十八年まで四百年近く仙北を知行した仙北殿は、科により西国に流されたと伝えられているが、それ以後のことについては物語に記されていない。その西国とはどこを指すのだろうか。福井県小浜市にある羽賀寺に、木造の秋田実季、安倍愛季（ちかすえ）（実季の父）の坐像[21]（江戸初期の作、市指定）が安置されている。佐藤晃によると、羽賀寺は「中世安藤（東）氏にとって特別な意味を持った寺[22]」であったようで、実季は「寛永二年（一六二五）に羽賀寺に百石の寄進を申し出、結果的には毎年五〇石を

羽賀寺に納めるという確約をするに至っている。[23]」と述べられる。国指定重要文化財の『紙本墨書羽賀寺縁起』（一巻）の巻尾奥書（慶長年間の記）にも、創建以来、衆徒や檀越（だんおつ）、黎民（れいみん）らの協力によって寺の運営を維持発展させてきたが、「秋田安倍實季」の懇志で修造を遂げた[24]ことが記されている。さらに、実季が羽賀寺に寄進する以前、永亨七年（一四三五）に勅命を受けて羽賀寺を再建再興[25]した「奥州十三湊の日之本将軍安倍康季」という人物が居り、実季の八代前の祖先にあたる。

安藤氏の北奥羽と羽賀寺のある若狭国とは深く繋がっている。これを伝説に援用させてみるなら、常陸坊（房）と八百比丘尼伝説[26]との関係が気になってくる。すなわち『清悦物語』の「清悦長寿物語」に記される清悦が「にんかん」を食べて長寿を得たことと、八百比丘尼が「人魚の肉」を食べて不老不死となったこととが重なるからである。この伝説内容の一致と、両地に伝承される背景には、ある特定の宗教者の関与が想定されるのではないだろうか。この問題については、後に稿を改めて追究することにしたい。

寛永七年（一六三〇）に常陸坊が仙北で没し、清悦上人も同年に死去したとする『清悦物語』末尾の記述との関連を追究するにあたって、秋田城之助（秋田実季）のその後を追ってみる。秋田城之助は慶長七年の国替を受けて秋田から常陸の宍戸に移ったが、寛永七年に科により浅間へ流される。[27]藩主および戦国大名としての人生は寛永七年で終えてしまう。同じ年に偶然にも常陸坊や清悦が死去する。

その秋田実季の書状の翻刻が、羽賀寺文書[28]に収録されている。収録される実季からの書状には寛永七年以降のものが多く、羽賀寺の住職と頻繁に書簡の往来があった。その中の慶安三年（一六五〇）の六月廿一日に書かれた一通の一部を紹介[29]する。

一奥州合戦ノ内とて御書付給候。是不断御心懸之験、…又北浦六郎ト候。初テ見申候。出羽之センホクニ北浦ト申所、クリヤ川之邊ニ并有之事候。吾等系圖ニ重任ノ下ニ此等を證據ニ書載可申候。加様ニ可有事明白ニ候。又頼良親忠良ト候。不審ニ存候。但、我等旧記之中ニ陟良ト申者候。

晩年の実季は、秋田氏（安東氏）の系図作りに没頭していたようで、右の書状からもその一端が伺える。佐藤晃[30]は、「実季の系図に見られる特徴は、「悪」と「善」の両端に振れる自家の先祖の系譜を、一つの存在の論理に観念的に集約させるという志向を持ってい

る点で特異なものがある。「勅免シテ北国ノカタメトナル」というのがそれである」と、その系図作りの方法を好意的に評価している。実季の系図作りには、ある政治的意図をも含んだ側面を持っていたように考えられる。要するに、秋田氏の家筋に関しては、前掲の佐々木慶市も「十五世紀のなかば頃下国安藤氏は南部氏の攻撃をうけて没落したので、その後上国安東氏が安藤家を継承して下国を号することになった。…この時、家号である安藤がこの後安東にすりかえられ、近世初期秋田系図の作成に当っては、代々の当主が鎌倉時代にまでさかのぼって「安東太郎」とされた[31]」と指摘しており、継承事情が複雑である。家号を守るために政界に働きかけていた実季の様子がみえる。福島本の「仙北ノ次郎」「家老ノ子孫」のいずれが「秋田城之助」であるのかを明らかにしない曖昧な表現の背景には、安東氏のそうした歴史事情に精通している『清悦物語』の語り手の苦渋が、作品から読み取れる。

五、まとめ

『清悦物語』の「仙北次郎物語」は、『吾妻鏡』や『奥羽永慶軍記』などの史料や史実を引いて作成されていることを、まず確認した。そして、物語末尾に秋田城之助を登場させ、秋田実季の話題へと意図的に展開させている点についても指摘した。その実季は寛永七年に蟄居し、同年には清悦および常陸坊も死去する。これは秋田実季の悲劇を、読者（聞き手）に訴えているのであろうか。また、小野田太左衛門の語る清悦と、常陸坊とが同一人物であるかのごとく匂わせている。しかも、「常陸坊仙北ニテ死去」（南部本）とわざわざ仙北の常陸坊と断っていることから、仙北の常陸坊を強調していることがわかる。ここから、常陸坊が所属する持渡津先達や秋田氏との関係をたどってきた。三段論法的にいえば、清悦上人は、持渡津先達（熊野修験）の語り手であったことになろうか。

以上のことを踏まえて『義経記』に話題を移すなら、巻七以降の「判官北国落ち」は「熊野及び熊野人の為の宣伝であつた」と柳田は述べ[32]、『義経記』後半の語り手に熊野山伏の影響を指摘する。その逃避行は近江の湖を梅津へ渡り、荒乳山を越えて越前に、それから諸所の関所や船渡しを経て、越後の直江の津までの地名の順序などにおかしいと思うところがなく、海辺伝いに鼠ヶ関から出羽に入り、三瀬を越えて庄内の大宝寺に入るという行程であり、それはすなわち「足利時代以後の、奥州人の京街道であつた」として、日本

海ルートをあげている。

本稿ではこの柳田の見解に添いながら、『清悦物語』における持渡津修験の常陸坊と十三湊を拠点とする安藤氏との関係、伊達藩配下にある名取の高館と持渡津修験の有力檀那の葛西家（清悦社）とのつながり、さらには秋田実季（安東氏）と羽賀寺との関係を踏まえ、日本海側ルートを往来する山伏や巡礼者らが、『清悦物語』の創作や伝説の遠景にあるのではないかという見通しを立ててきた。また一方では、秋田氏と南部氏との関係に不和を感じさせる内容が見受けられることから、そのような語り手と諸大名との親疎の関係が認められる。『清悦物語』が語る内容は、南部氏、秋田氏、伊達氏との微妙な関係の上に成り立っている部分もみられる。

最後に『清悦物語』は、寛永七年以降には、物語の骨子が既にできていたことは、写本の末尾より解釈できる。清悦翁傳には「寛文八年或以國字記之」[33]とあるものの、万治二年（一六六〇）に、秋田実季が死去していることから、写本形態が整ったのはその後ともいえる。

今後の課題は、東北に伝わる類似の物語をとりあげ、持渡津先達のような宗教者と大名等の関わりを探っていくと同時に、八百比丘尼伝説や海尊伝説についても調査を深めていく予定である。

（1）三田加奈「『清悦物語』の諸本と分類及び背景―書誌事項と地名を中心にして―」『共立レビュー』三十七号 二〇〇九

（2）『仙臺叢書』所収「東藩野乗」下「清悦翁傳」（仙臺叢書刊行會 一九二五 四二二頁）には、「寛文八年或以國字記之」とある。

（3）宮城県図書館蔵本の『清悦物語』（内題 奥州衣川合戦之次第 菊田定郷氏旧蔵 弘化元年）の奥付に「寛永七年十二月十日 小野太左衛門書き置」を書写したという記録がある。

（4）管見の及ぶ限りでは、十九本の写本を確認している。（前掲拙論（三十七号）による。）

（5）柳田國男「東北文学の研究」『雪国の春』 角川学芸出版 一九五六

（6）野村純一「藜の杖と椿の油　――二つの不老長寿説話――」「椿は何故「春の木」か――「八百比丘尼」と「常陸坊海尊」――」『野村純一著作集：伝説とその伝播者　六巻』清文堂二〇一二

（7）前掲拙論（三十七号）による。

（8）例えば、宮城県仙台市にある青麻神社に、併祀：常陸坊海尊（清悦仙人）とある。また、「『清悦物語』も私の見た本だけでは、少なくとも話者清悦は常陸坊にあらず、「聞けば常陸坊もまた長命して、仙北の方に住んでいるそうな」とよその噂にして語っているにも関わらず、一方には仙台以北、平泉地方の一帯にわたって、今なお清悦とは海尊さまの事と、思っている人が多いのである。」（柳田國男「義経勲功記」（東北文学の研究：雪国の春））とある。

（9）須田学「清悦物語」『昔話伝説研究』二十一号　一四六～一五八頁二〇〇〇

（10）前掲拙論では、十九本の写本のうち、南部家図書本系統は三本、別本系統は十五本、異本を一本と位置付けた。

（11）宮城県栗駒に伝わる判官森の伝承の影響を受けていると考えられる。沼倉小次郎高次が、義経の墓を栗駒の地に築いたと伝わる。（『観蹟聞老志』や『平泉雑記』「義経墳墓」などによる）

（12）義経の口腔に含まれてあった梶原父子の讒言を訴える書状のこと。幸若舞『含状』が詳しい。

（13）国史大辞典編集委員会［編］『国史大辞典』一巻　吉川弘文館　一九七九（秋田実李・秋田氏の項）

（14）前掲拙論（三十七号）による。

（15）高橋正「出羽国北部における熊野信仰の師檀関係に関する覚書」『秋田県立博物館研究報告』第三十三号　七十五～八十二頁　二〇〇七

（16）勝倉元吉郎「熊野・持渡津先達と板碑――石巻地方の板碑（8）」『歴史考古学』（五五）　三十一～四十六頁　二〇〇四

（17）三田加奈「『清悦物語』における高館合戦の津波表現　――（付）『清悦物語』翻刻」『共立レビュー』四十一号　二〇一三

（18）高橋正「出羽国北部における熊野信仰の師檀関係に関する覚書」『秋田県立博物館研究報告』第三十二号　七十五～八十二頁　二〇〇七

（19）遠藤巌「史料紹介 湊學氏所蔵秋田湊文書」『青森県史研究』第三号　一九九九

（20）佐々木慶市「津軽安藤氏の研究」『中世東北の武士団』　名著出版　一九八九

(21)『若狭小浜のデジタル文化財』羽賀寺「木造安倍愛季・秋田実季坐像」2016.11.30 アクセス
http://www1.city.obama.fukui.jp/obm/rekisi/sekai_isan/Japanese/data/192.htm
(22) 佐藤晃「系図を綴る中世武士」『日本文学』四十七巻七号　一～九頁　一九九八
(23) 前掲佐藤晃氏に同じ。結果的には子息の俊季により実質的に寄進料が引き下げられている。
(24)『若狭小浜のデジタル文化財』羽賀寺「紙本墨書羽賀寺縁起 一巻」2016.11.30 アクセス
http://www1.city.obama.fukui.jp/obm/rekisi/sekai_isan/Japanese/data/206.htm
(25) 福井県立若狭歴史民俗博物館［編］図録『特別展 羽賀寺　――日本海交流と若狭――』二〇〇〇
(26) 羽賀寺から五キロほど離れたところに空印寺がある。空印寺は、八百比丘尼の入定の地として一般に知られている。
(27) 福井県立若狭歴史民俗博物館［編］図録『特別展 羽賀寺　――日本海交流と若狭――』二〇〇〇
(28)「羽賀寺文書」小浜市史編纂委員会［編］『小浜市史　社寺文書編』小浜市役所　一九七六
(29)「羽賀寺文書八二」小浜市史編纂委員会［編］『小浜市史　社寺文書編』小浜市役所　一九七六
(30) 佐藤晃「系図を綴る中世武士」『日本文学』四十七巻七号　一～九頁　一九九八
(31) 佐々木慶市「津軽安藤氏の研究」『中世東北の武士団』　名著出版　一九八九
(32)『柳田國男全集』三「雪国の春」所収「東北文学の研究　奥浄瑠璃の元の形」筑摩書房　七五六頁　一九九七
(33)『仙臺叢書』所収「東藩野乗」下「清悦翁傳」（仙臺叢書刊行會　四二二頁　一九二五）には、「寛文八年或以國字記之」とある。

《参考文献》

貴志正造［訳注］『新版 全譯 吾妻鏡』二巻 新人物往来社 二〇一一
今村義孝［校注］『復刻 奥羽永慶軍記』無明舎出版 二〇一六